

プロジェクト5 「エイブル・アート SDGs セミナー」

持続可能なものづくりや環境のあり方について、福祉の現場での創作や仕事づくりの実践から考えるセミナーを実施しました。今回のプロジェクトに参加したパートナー団体の「くふう」「副産物産店」のみなさんと、たのしみつつ、あそびながらものの循環を考えるヒントを考えました。



まずは、「再彩ファクトリー」の取り組みについて、「くふう」代表の藪内さんから、廃材を新しい素材に生まれ変わらせ、福祉施設の仕事にしていく仕組みづくりまでの過程をお聞きしました。障がいのある人の個性をいかせる仕事をつくること、商品が福祉と社会の窓口になること、ものづくりをするなかで、じつは人と人の関わりを作っていることに気づいたなど、この



プロジェクトをとおしての発見をお話しました。

副産物産店の山田さん、矢津さんには、創造的な環境のなかで、新しい視点をもたらすことで生まれる価値についてお話いただきました。副産物を考えることは、主産物、つまり一番大切なものを考えること。福祉施設で出会った”福”産物には、すでに豊かな循環があること。それらは障がいのある人たちの幸せを中心に考えたときに生まれてくるものであること。そして福祉が外とつながる際の部分に副産物があるのではないかということなどを共有しました。



セミナー全体をとおして、あらためて福祉の活動のなかに SDGs の取り組みの原点をみつけた反面、福祉施設などで展開されている魅力的な活動がなかなか社会に伝わっていないという課題も見えてきました。福祉というジャンルをこえて、それぞれの地域で取り組まれている、目に見えにくい取り組みを可視化していくこと、それには日常に異なる視点をもたらす「あそび」の視点、すなわちアートやユニークなものづくりをとおして関わりあうことの大切さを共有しました。

参加者からは「答えのないテーマであるとも言えると思った。自分の感性を磨いて、観点をかえてみたいと思った」「それぞれのこだわり、思いを聞き、共感ばかりの内容でした。捨てられるものの寿命を1日でも長く、という藪内さんの言葉も胸に響きました。「捨てられてしまうものや、一見価値のないものを方向性を変えて価値あるものにしていく、というのは福祉につながっていくと思います」といった感想をいただきました。



登壇者：藪内都（くふう）、矢津吉隆・山田毅（副産物産店） 進行：岡部太郎（一般財団法人たんぼぼの家 常務理事）

日時：2022年11月20日（日）13:30～15:00

現地参加＝会場：近畿ろうきん肥後橋ビル 12F メインホール

参加者：31名